

## 要 旨

日本列島には、古代から多くの大陸文化が伝わったが、その多くが朝鮮半島を経由して日本に伝来したものであった。その文化伝来で重要な役割を果たしたのが、朝鮮半島に最短距離で 49.5 キロメートルの位置にある対馬であった。古代の船による大陸と日本列島を結ぶルートで、最も危険を回避できたのが対馬を中継地点とする航路であった。古代から日本と朝鮮半島との関係で対馬は、重要な役割を果たしてきたが、中世から近世の日本と朝鮮との交易関係の中でも、対馬が交易の窓口として特別な役割を果たしてきたことは多くの研究者によって明らかにされてきている。

本論文では縄文・弥生時代の対馬から、18 世紀初めに雨森芳洲が対馬藩で日本で初めて朝鮮語教育を始めるまでの時期を、第 1 部「古代対馬人の周辺状況と多言語習得能力に関する研究」と第 2 部「平安時代後期の対馬人の朝鮮語能力の研究」と第 3 部「14 世紀末から、雨森芳洲が朝鮮語教育を始めるまでの、対馬人と朝鮮語の関係について」という 3 部に分けて構成している。歴史的な出来事は、過去の歴史から影響を受けて生じたものであり、雨森芳洲が対馬藩で朝鮮語教育を始めたのにも、その行為が行われるようになった歴史的背景が存在する。本論文は、時代的に区分した 3 部の構成によって、古代から近世初期までの対馬人と朝鮮半島のかかわり方を、対馬人と朝鮮人が、その交流での会話で使った言語を研究テーマとして、その研究結果を報告するものである。

トーマス エジソンが登場するまで、会話で使用された言葉は、音の記録としては残されておらず、それまでの会話で話された言葉を明らかにするためには、文字で残された多くの記録を、調べる必要がある。対馬は、古代から大陸と日本との中継地であり、対馬と朝鮮半島との交流を調べることは、近世までの日朝関係を研究する時の重要なテーマとなる。倭寇、倭館、朝鮮出兵などについては、多くの先行研究が見られる。しかし、対馬人の朝鮮語会話能力を明らかにすることを主課題とした他の研究者の報告は行われておらず、この研究が古代から江戸時代初期までの対馬人の外国語能力、朝鮮語能力を明らかにすることを主テーマとして試みた最初の論文となる。

第 1 部では、対馬の古代遺跡から出土する縄文・弥生時代の出土品から、古代の対馬が、北方海民や朝鮮半島や東南アジアや日本の、その当時の文化の中継点になっていたことを

示した。これらの多彩な出土品から、対馬が古代文化の交流点となって、縄文・弥生時代の対馬人が周辺地域の言語を理解できる多言語能力を持っていたことを報告している。

また、古墳時代の対馬は、『魏志倭人伝』に「無良田食海物自活乗船南北市糴」と記載され、この時代の対馬は、農耕地が少なかったために、船を使って日本と朝鮮半島で盛んに交易を行っていた人々が住んでいた地域であったと示されている。対馬の古墳時代の遺跡からも大陸や日本から対馬にもたらされたと思われる出土品があり、国境が存在しない時代の対馬人が、朝鮮海峡・対馬海峡を自由に移動して、交易を行っていたことを示している。史料に記載されたこのような内容から、古墳時代の対馬人も多言語能力を持っていたと報告した。

その後、大和政権が日本を統一して、対馬が日本の中央集権体制の中に組み込まれる時代になるが、大和政権と新羅の関係が悪化することにより、対馬と朝鮮半島との直接の交易が、大和政権によって禁止されて、この時代の対馬人は、それまでに習得していた朝鮮語能力をほとんど失うことになった。第1部に加えて第2部でもこの状況を報告している。

第2部では、平安時代後期の対馬人の朝鮮語能力について研究報告している。平安時代後期につながった平安時代前期の記述は、第1部の内容と若干時期が重なるが、歴史的なつながりとして示している。

平安時代に書かれた『源氏物語』や『うつほ物語』に記載された高麗語に関する内容から、平安時代の人々の高麗語に対する考えが分かる。この時代の物語では、高麗語に関係した話を引用して、高麗語は実用のための外国語ではなく珍しい言葉として描かれ、物語の中での高麗語は主人公の権威や能力・教養を示すものとして描かれていることを示した。

平安時代の日本でも、当時の知識人が学習の必要があると認識していた外国語は中国語であり、外国語の学習とは中国語での会話ではなくて漢文の習得であった。9世紀に対馬に新羅人が漂着したが、対馬には新羅人の言葉を理解できる者がおらず、大宰府に新羅語の通事を求めたことが『日本後記』弘仁3年の記録に示されている。この記録は、9世紀の対馬に朝鮮半島の言葉を理解する住人がいなくなっていたことを示している。交易を禁止されたことによって、対馬が貧困に苦しんだ時代であり、最短で朝鮮半島から50キロメートルも離れていない対馬で、朝鮮半島の言葉を理解できる者がいなくなっていた時代であった。

しかし、日本の中央集権体制が弛んだ 11 世紀になると、対馬人の中には貧しい生活から逃れるために、再び朝鮮海峡を渡って大陸と対馬を往来する人々が現れ、対馬人の朝鮮語能力は復活している。高麗時代の恭愍王 18 年の記録に朝鮮半島で生活のために倭人が居住を始めたことが示されて、高麗時代末期の倭人は、巨済島や南海島に住みつき、普段は漁業や農業を行いながら時には海賊を行うという生活を行っていた。この時期の倭人の多くは農地の少ない対馬から逃れてきた対馬人であり、この高麗での対馬人と高麗人との交流の中での対馬人が朝鮮語を習得するようになった。これが近世につながる対馬人の朝鮮語学習の始まりである。ここまでの内容を第 2 部で報告している。

第 3 部では、前半で室町時代の日本と朝鮮政府との関係から、朝鮮出兵までの対馬人の朝鮮語能力の推移を研究して報告している。

朝鮮では 15 世紀にハングルが考案されたが、中国文化との関係が深かった朝鮮では、公的な文書でハングルほとんど使用されず、この時代の歴史的参考資料として研究の対象となる史料は、全てが漢文で書かれていた。この時代の日本側では仮名文字が使用されるようになっていたが、本論文の参考資料となる『宗家文書』などの記録も、主に漢文で書かれたものであった。そして、この漢文で記された文献の研究によって多くの歴史的事実が明らかにされて来ている。しかし、この時代の日朝の交流で、日本人と朝鮮人がどのような言語を使用して会話を行われていたかを示す記録は少なく、また、会話で使用された言語に関する研究がほとんど行われていないのが現状である。

第 3 部の前半では対馬人と朝鮮人との会話で使用された言葉を知るために『朝鮮王朝実録』と『宗家文書』に記載された内容を中心にして研究を進め、14 世紀末から朝鮮出兵までの時代を、三浦の乱以前と三浦の乱以後に区分して研究を行い、その結果を報告している。また、『老松堂日本行録』より朝鮮の回礼使一行が、漢城と京都を往復する間に出会った日本人との交流記録の研究を行い、日本人と朝鮮人の交流時の会話で使用された言語について研究報告を行った。

第 3 部の後半では、朝鮮出兵から雨森芳洲が対馬藩で朝鮮語教育を始めるまでの期間の、対馬人と朝鮮語の関係を示している。

朝鮮出兵時に初めて多くの日本人朝鮮語通事の名前が記録として残されているが、彼らは、朝鮮人との交易で朝鮮語を学んだ身分の低い対馬人であり、朝鮮通事としての教育を受けた者ではなかった。

17世紀初期より対馬藩は、朝鮮通信使一行の接待役となり、当初は外交で必要となる漢詩・漢文に対して教養のある外交僧が外交官として必要と考えていた。しかし、朝鮮通信使と直接対応する現場では、朝鮮語での交渉を行うことの出来る教養のある朝鮮語通事が必要と考えるようになってきていた。これは自然な経過であったが、雨森芳洲の登場以前の対馬藩では朝鮮語教育を行うことによって、教養のある朝鮮語通事を養成した記録は残されていない。

第3部の後半では、朝鮮出兵の講和後、再開された倭館での対馬人と朝鮮人との会話や、来日した朝鮮通信使との会話が、どのような言葉で行われていたかを研究して報告している。また、室町時代から江戸時代初期までの日本で朝鮮語を習得していたのは、どのような身分の人であったのかを示して、さらに、対馬藩で雨森芳洲が『交隣須知』を著すことになった朝鮮語に対する考え方の変化を示している。

近世での外国語通事の養成は対馬藩だけではなく、長崎ではオランダ語通事や唐通事の養成が行われ、薩摩藩でも朝鮮語通事が存在していた。しかし、対馬藩と長崎・薩摩藩とは、その通事の養成方法と通事に対する考え方が異なっており、対馬藩での雨森芳洲による通事養成が、近代国家での外国語教育につながるものであったということを示し、対馬藩での朝鮮語教育の始まりが、近代日本の外国語教育につながる教育政策であったという報告を行った。これは日本の外国語教育の始まりを示す意義のあることである。

本論文で、対馬藩と朝鮮語との関わり方を報告できたことは、雨森芳洲が考えた日本と韓国・朝鮮との『交隣提醒』を改めて認識できる意義のある研究であったと考えている。